

# 明治期日本の和歌と〈政治〉

—— 高崎正風を中心にして ——

松 澤 俊 二

**キーワード：和歌，政治，帝国日本，高崎正風，明治天皇**

## はじめに

最初に本稿の目論見を記すと、和歌あるいは歌人たちが、明治という新時代を迎えるにあたり、どのようにこのジャンルを定義し、変質せしめ、その期を生き延びたか測定することである。

例えば 1872 年に福澤諭吉『学問のすゝめ』は、〈世上に実の無き文芸〉として作歌することを挙げた。それに代わって〈普通日用に近き実学<sup>1)</sup>〉を推奨したこと、また同書が学制の理念に影響を与えて国家による教育が実学重視の線に沿って立ち上げられたこと<sup>2)</sup>を想起してもよい。これは大局的には、和歌をたしなむ人々とそのジャンルにとって、危機の時代の到来とも言える。もっとも宮中、明治天皇睦仁の周辺に限ってみれば、後に見るように歌会始への民間人の詠進許可や、在野歌人の文学御用掛などへの登用があり、別の流れが存在した。だが、そうして新たに取り立てられ、睦仁に侍した歌人たちには殊更、そのジャンルを国家有用のものとして位置づけ、自らを含む歌

1) 本文引用は福澤諭吉／伊藤正雄校注『学問のすゝめ』（講談社、2006）より。

2) 山住正巳『日本教育小史』（岩波書店、1987）参照。

人という立場を確固たるものに押し上げようとする意図があったと考えられる。

この問題を、高崎正風（1836～1912）を材料に考えてみたい。高崎は天保期に薩摩藩士の家に生まれ、幕末には藩士として国事に奔走、のち明治初年代に新政府に参加した。1876年に文学御用掛、1912年に正二位勳一等男爵として死去するまで、宮内省御歌所長、天皇・皇后への和歌の指導、年々の歌会始の選者・点者として宮中歌道の要職を占め続けた。また1891年5月には「しきしま」の「現今和歌十大家」で最高点、1899年5月「太陽」誌では「十二歌匠」の第1位に選ばれている。これら雑誌の読者投票の結果からはその名が巷間にも高く、朝野を問わず、当時歌道の最有力者と認識されていたことが理解される。和歌は香川景樹を祖とする桂園派の流れをくみ、古今集、紀貫之を重視<sup>3)</sup>した。

だが往時の名声に比して、高崎が論じられること<sup>4)</sup>はこれまで少なかった。その理由を端的に言えば、実作者・研究者の興味が1890年代に相次いで登場した与謝野鉄幹、正岡子規ら「新派」歌人たちに惹き付けられてきたからである。彼ら「新派」の攻勢<sup>5)</sup>により高崎ら「旧派」は論・作ともに超克された

3) 以上、高崎の履歴は、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』十二卷（昭和女子大学光葉会、1959）また北里闌『高崎正風先生伝記』（啓文社印刷工業、1959）を参照。

4) 高崎の先行研究は註3)の他に木俣修「高崎正風」（『明治の歌人』短歌新聞社、1969）、清水勝「桂園派歌人八田知紀と高崎正風」（『鹿児島女子大学研究紀要』1997・3）等がある。また高崎の属した御歌所の詳細、その役割を論じたものとして恒川平一『御歌所の研究』（還暦記念出版会、1939）、小林幸夫「明治初期・中期における古今集の復活」（『古今集 新古今集の方法』岩波書店、2004）、「旧派和歌」から「新派」和歌への交代期について論じたものに小泉夢三『近代短歌史明治篇』（白楊社、1955）がある。

5) 例えば与謝野鉄幹「亡国の音」（『二六新報』1894・5・15）は、高崎の歌を、〈品格の野卑構想の卑俗、あはれ誰がこを現代歌人の第一位に居る人の作とうべなはむ〉と酷評した。また正岡子規「十たび歌よみに与ふる書」（『日本』1898・3・4）は、〈御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの様に考へ、従てその人の歌と聞けば、読まぬ内からはや善き者と定めをるなどありがちの事にて・・・（中略）・・・御歌所とてえらい人が集まるはずもなく、御歌所長

と考えられ、後者は周縁化<sup>6)</sup>されてきた。「近代短歌」史観とも呼ぶべきこのパラダイムは、「新派」歌人を中心に叙述し、「旧派」は取り上げられても、その踏み台として位置づけられる。

同パラダイムは、長く明治期短歌の研究、鑑賞を規定してきた。だが近年ようやくその軌を逃れ、高崎や御歌所を対象とする研究が現れ始めている。例えば長福香葉は、高崎の明治2、30年代の歌論を詳細に読み込んだ<sup>7)</sup>。「古今和歌集」仮名序や香川景樹の説を踏襲するのみと論断されてきた、その歌論の細部を再検討しようというのである。また宮本誉士『御歌所と国学者』（弘文堂、2010）は高崎の歌論のみならず、薩摩国学の影響を受けた思想形成の過程、歌人としての活動はむろんのこと、後年の教育勅語の普及を企図した社会的な諸活動等にも言及している。実証的な切り口で、これまでさほど注目されてこなかった高崎の諸営為を資料から跡づけた功績は大きい。そして、これらの諸論を参照しつつ、先に挙げた本稿の課題を確認するならば、高崎の歌論や種々の社会活動とが、明治という新国家発足の時代に、和歌を有意なものとして適合させるための方途とどのように繋がり、展開されたか検証することだろう。そうして本稿は、高崎の1876年から1910年までの歌論、営為に着目して上記の課題を検討する。

---

とて必ずしも第一流の人が坐るにもあらざるべく候〉として、実名こそ挙げないが高崎の御歌所長たる資格に疑義を呈する。

- 6) 例えば戦前の『現代短歌集・現代俳句集』（改造社、1929）において、「旧派」歌人は収録152名の歌人中、26名に過ぎない。高島健一郎「序列化される歌壇—改造社版『現代日本文学全集』と斎藤茂吉」（『横浜国大言語研究』2003・2）を参照。また戦後の三一書房『現代短歌大系』（1972～1973）、筑摩書房『現代短歌全集』（1980～1981）に「旧派」歌人は収録されていない。
- 7) 長福香葉「高崎正風歌論の変質—流派と模倣に対する意識」（『表現技術研究』2010・3）、他に長福には「新派」歌人たちからの攻撃を受けながらも、なお歌壇に勢力を保持する御歌所派を再考した「明治御歌所派歌壇の再検討—鉄幹・子規による批判をめぐって」（『国文学攷』2009・3）がある。

## I, 明治初年代の和歌観, 和歌史観

高崎のまとめた著述で最初に公にされたものは『埋木廼花』<sup>うもれぎのはな</sup>（宮内省，1876）である。これは高崎が，1876年の天皇の「奥羽」巡行に随行した際，政府関係者や在地の人々の詩歌を集めて編んだアンソロジー<sup>8)</sup>である。まず，その序文から彼の明治初年代の和歌観，和歌史観を確認しておく。なお以下の『埋木廼花』本文の引用は「明治聖徳記念学会紀要」（2006・11）掲載の翻刻を使用している。

名ぐはしき海や山や，城の址関<sup>ナヅリ</sup>の余波など珍しき所々をば，写真師におほせて，其の真景<sup>カゲ</sup>を写さしめ給ひつれど，ひとり目にみえぬ人<sup>ヒトノココロ</sup>情と，形なき風俗<sup>テフリ</sup>とをいかがはせむ。これが姿をうつしこれが影をとどむるものはやがて歌ならずや，されば歌は人情風俗の写真ともいふべきものにしあれば（…後略）

まず最初に，巡行の先々で目にした海山の名所，城や関所跡などを写真師に命じて撮影させた旨が語られる。だが高崎に問題視されているのは，写真は〈真景<sup>カゲ</sup>〉を写すけれど，〈目にみえぬ人<sup>ヒトノココロ</sup>情と，形なき風俗<sup>テフリ</sup>〉とが写し難いことだ。ではどうしたらいいのか。高崎はこれらを捉えるものとして和歌に言及する。それは〈人情風俗の写真〉であると言う。対象こそ異なるが，写すことにおいて和歌は写真と等価であり，当時最新のテクノロジーと並べられて，その機能がアピールされている。

その後，高崎は和歌の歴史を叙述してゆく。以下の引用は，本来は連続した箇所だが読解の便のために，【1】から【3】に分けて掲出した。

8) 同書の詳細は拙稿「埋木廼花の政治学—天皇巡幸の文学表象」（『日本文学』2008・6）を参照願いたい。

【1】 往古より言囀ぐ<sup>コトサヘ カ ラ</sup>支那国<sup>ウタ</sup>には詩を書礼楽と叙たたへて其道のいとも尊きをしへ草とは摘みはやせり。我大御国は上代より言痛く言拳せぬ<sup>コチ タ</sup>国質<sup>ガラ</sup>にしあれば、御代々々の勅撰或は先哲の家集の類、くれ竹のよよに聞ゆるが浜の真砂の数おほかれど、さるかたに用ゐられしことはなかりき。ただ其精神<sup>ココロ</sup>の折にふれ事に感て黙止あへず発出る<sup>カマケ モダシ</sup>嗟歎<sup>ウチイツ</sup>の声音<sup>ナゲキ</sup>にしあれば、聴者<sup>コエ</sup>の心を感動<sup>ウゴカ</sup>し男女の仲を和らげ猛きもののふのこころを慰むるなど隠然<sup>ヒトシレズマツリゴト</sup> 政化<sup>タスケ</sup>の補助となりしことも、かき数へんにもたどたどしきまになむ。

【2】 されどくだりての世には歌てふものを一の玩弄物<sup>モテアソビモノ</sup>と思ひ謬り、且題詠てふことの起りしよりしらずしらず実をはなれて虚をさぐり本を忘れて末にはしり、つとめて人の耳を驚さむとする流弊<sup>ツイエ</sup>出来て、いやおとろへにおとろへ行てまことの歌はほとんど地をはらふにいたれり。

【3】 近代に至りてやうやう紀の河上にさかのぼり、高円山の奥を尋ぬる人々<sup>ツキ</sup>踵起りて此みちのしるべせしより天のしたの歌の体<sup>サマ</sup>ややあらたまり行しかども、久方の雲のうへはかへりて河霧たち隔て、さる風の吹通はざりしを、今の大御代となりてもろもろの事をすて給わぬあまりに歌の道をおこし給はむとて、其家とたておかれしを<sup>ヤメ</sup>廃止られ此ことに秀たる人々を<sup>ツドヒハジメ</sup>挙もちる給ひ、はた花の願月の夜はさら也折にふれ時につけつつ侍らふ人々に勅題を賜り、としの御会 始にはあまねく御題を告しめして天の下の歌をさへめして見そなはすこととはなりになり。されど猶彼流弊<sup>ツイエ</sup>をまぬがれずしてまことの言の葉すくなければ、さかしおろかなりとしろしめす料にはいかがあらむ。

ここでは和歌の歴史が、〈上代〉、〈くだりての世〉、〈近代〉と〈今の大御代〉とに分けられ検分されてゆく。

冒頭に言及されるのは〈言囀ぐ<sup>コトサヘ カ ラ</sup>支那国<sup>ウタ</sup>〉の〈詩〉である。〈支那国〉では、

〈詩〉が儒教の經典である五經の一として学ばれ、治国の一方途として尊ばれていたことを言うのだろう。ただし、〈支那国〉でそうだからといって、〈我大御国〉でも同様に、歌が政治と結ばれ、用いられていたわけではないという。それでも、それが人々の<sup>モダシ</sup>〈黙止あへず〉に発せられる<sup>ナゲキ</sup>〈嗟歎の声音〉<sup>コエ</sup>であるゆえに〈聴者の心を感動し男女の仲を和らげ猛きもののふのこころを慰むるなど〉、人々を感化する力を有していた。その結果として、<sup>ウゴカ</sup>〈隠然 政化の補助〉<sup>ヒトシレズマツリゴト</sup>となったことも数多いのである。このように高崎は〈支那国〉とはあくまでも差別化しつつ〈我大御国〉の歌の在り方について説明を加えている。

## 【1】

続く〈くだりての世〉で歌は〈玩弄物〉と思われるようになった。特に題詠の弊害<sup>モチアソビモノ</sup>により、歌は〈実〉から〈虚〉に遷り、〈本〉を忘れて〈末〉を追った。〈人の耳を驚さむとする流弊〉<sup>ツイエ</sup>が現れ、〈まことの歌〉が〈地をはらふ〉つまり、無くなったと言う。文脈から、ここでいう〈まことの歌〉は、上代には存したという〈嗟歎の声音〉としての歌であることを確認しておく。【2】

次に論じられるのは、〈近代〉と〈今の大御代〉である。まず〈近代〉の語に想定されているのは近世、江戸期だろう。この時期、〈紀の河上にさかのぼる者〉、つまり紀貫之を遵奉するものが現れ、彼らにより〈歌の体〉<sup>サマ</sup>はやや改まったと高崎は評価する。これは高崎の私淑する桂園派の祖香川景樹などを指し、つまり自派の功績を述べた箇所である。しかし景樹は在野の歌人であって、〈久方の雲のうへ〉、つまり宮中には改革の風は行き渡らなかった。

けれども現今の〈大御代〉となり、それまで宮中歌道の權威であった歌道家の廃止、〈此ことに秀たる人々〉すなわち高崎ら在野歌人の登用、臣下への勅題下賜、歌会始に於いて民間の人々にも詠進が許可されるなどの諸変革が行われたという。だが、人々の寄せる詠進歌もやはり〈人の耳を驚さむとす

9) 題詠の弊害を指摘したこの高崎説は、その師である八田知紀からの影響であることを、宮本誉士「御歌所長高崎正風の思想と人脈」(『御歌所と国学者』所収。書誌は本文前掲)は指摘している。

る流弊〉を逃れきれず、〈まことの歌〉が少ないと高崎は嘆くのである。【3】

以上で〈上代〉より〈大御代〉までの和歌史が概観されたわけだが、高崎はそれを〈まことの歌〉の減少過程と認識していることに注意しておこう。そしてその〈まことの歌〉の減少は、次のような問題を呼び起こす。つまり、〈上代〉であれば〈男女の仲を和らげ猛きもののふのこころを慰〉めなどした、さらに天皇が人々を〈さかしおろかなりとしろしめす料〉としてあった和歌の機能が今では失われかけているという問題である。ゆえに現今の和歌では〈ヒトシレズマツリゴト 隠然 政化の補助タスケ〉となることはほとんど期待できない、という認識が高崎にあるのだ。

こうした認識は、天皇睦仁にも直接に開陳されている。『進講筆記』（吉川半七、1893）は高崎が睦仁に対して、1883年に古今集仮名序を講義した記録である。ここには〈古の歌〉がすべて〈嘆息の声音〉であったこと、それが〈真の歌〉であり、〈人の心を撮影にとったと同様〉であること、そして過去にはこうした和歌を用いて天皇が〈作者の賢愚得失をも知しめした〉と語られる。

翻って、現今の明治期では、睦仁が〈此道の研究〉に熱心であり、人々に〈歌をたてまつらしめて御覧遊ばされる〉ことが〈いにしへの聖帝明王〉の事績と通うと言い、睦仁を古代の明主と重ねる。歌会始における民間人の「詠進」許可を称えた箇所であるが、ここでも人々の〈詠進の歌〉が、かつてのそれと異なることが問題視される。

只々赤顔に堪へませぬことは、詠進の歌、いにしへのよみくちとちがひて、兎角後生の弊風を脱しませぬは、遺憾千万でござりまして、ことに正風は薄徳菲才を以て、点者に挙げられ、おほけなくも両陛下の御製を奉戴し、歌道頭要の地位を冒して居ますれば、今此章を講じて聖聴を煩し奉るにつけて、冷汗が背にながれまして、恐懼のいたりに堪へませぬ。

高崎が〈遺憾千万〉に思い、〈冷汗〉が流れ、〈恐懼〉すると言うのは、睦仁が古代の明主に比されるのに、人々の〈詠進の歌〉が〈いにしへのよみくち〉に対応してないからである。そして歌会始の詠進歌を審査し、選をする〈点者〉で〈歌道顕要〉の地位にある高崎には、明治に欠如した〈まことの歌〉の回復が、課題として立ち上がってくる。そして、それが回復されるときに、和歌は再び〈政化〉<sup>マツリゴト</sup>を助けることとなり、国家に有意なものとして定位されるだろう。

## Ⅱ、官僚・社会活動家としての営為

高崎が当代における欠如を憂うる「まことの歌」、それはまた〈嗟歎の声音〉<sup>ナゲキ コエ</sup>であり、〈人情風俗の写真〉でもあった。その回復がなされ、政治と結びつくことがあるならば、それは和歌により可視化・抽出された「まこと」＝人々の人心が政治の対象となることを意味する。周知の通り和歌を治国の具として政治と結ぶ発想、いわゆる「政教主義的文学観」<sup>10)</sup>は、このジャンルの歴史の上では目新しいトピックではない。だが高崎の場合、注目する必要があるのは、人心を政治の対象とする発想が、彼の歌人としての営為のみならず、その官僚や社会活動家としてのさまざまな施策、思想とも対応していると考えられることである。

例えば1879年、宮内官僚であった高崎は同僚の福羽美静らと、〈明治維新前後に於ける旧藩士及び志士の言行・節義を編述し、以て修史の料に資し風教の資に供せんこと〉<sup>11)</sup>を宮内卿に願い出、その取り纏め役を命ぜられている。また1881年には、元田永孚らとともに編纂した『幼学綱要』が完成する。同書は、和漢の事績、菅原道真や楠木正成、また蜀の諸葛亮などの例話を掲げ

10) 渡辺秀夫「〈歌のちから〉天地・鬼神を動かすもの—『礼楽』と『歌』」（『国語と国文学』2002・5）の語。同論では、古今集仮名序を検討して〈「和歌」によって国を治める〉思想を「政教主義的文学観」と呼んでいる。

11) 『明治天皇紀』四巻（吉川弘文館、1970）、明治一二年九月一六日の記述。



て、〈国民の思想と道德実践の指導〉<sup>12)</sup>のため編まれたとされるが、これらの編述に関わっていた事実からは、人々の言説や履歴を歴史化し、〈風教の資に供せん〉や〈道德実践の指導〉などの語に示されるように、国民の人心陶冶に用いようとした高崎の仕事の性質が見えてくるだろう。さらに次のような例もある。

十九日、往年侍補高崎正風、同元田永孚と御前に祇候せる日、明治功臣の写真を蒐集して添ふるに其の歌詩を以てしたまはば、感興頗る深かるべき旨を聖聴に達し・・・(中略)・・・現在文武百官の写真を座右に備へたまはむとし、之れが蒐集を宮内卿に命じたまふ・・・(中略)・・・翌十三年三月二十二日太政官は、参議大隈重信等六名を除くの外、大臣以下三十八名の写真集まれるを以て、一人三葉宛を宮内省に送付す、同年同月天皇、更に各官省准奏任官以上並びに麝香間祇候、其の他有意華族の歌詩を蒐集したまはんとす。

ここで高崎は元田永孚とともに〈明治功臣〉の肖像写真と〈其の歌詩〉の蒐集を天皇に願い出る。その理由として〈感興頗る深かるべき〉ことを睦仁に助言したとあるが、この蒐集は君主の興味を満足させる以上の意味を持つだろう。天皇はそれを宮内卿に命じ、その旨はさらに政治の府である太政官にも伝わり、写真が集められている。いささか大仰にも見えるが、これは写真蒐集という行為が、天皇周辺にとって大事であったことを示す証左だろう。一般にコレクションする側とされる側では、その権力は非対称的である。蒐集者は蒐集物に対して一方的にまなざし、カテゴリー化し序列化することが可能である。つまりコレクション行為そのものがコレクション対象に対して、圧倒的な権力差を顕示するだろう。そうなればそれは支配行為そのものとも

12) 海後宗臣『教育勅語成立史の研究』（東京大学出版会、1965）

言える<sup>13)</sup>。

更に注目したいのは、高崎らは肖像に当人の〈歌詩〉、つまり和歌や詩を添えることを主張していることだ。ここで高崎が和歌を〈人情風俗の写真〉と解していたことを想起したい。ならば、天皇は臣下の詠作を通してその心中まで覗き見ることになる。つまり詩歌蒐集は天皇の支配を、肖像という外形に加え、その内面の領域まで進めるものであったとも解しうる<sup>14)</sup>。

また、詩歌蒐集から三年後、1883年に高崎は、「かなのくawaii」に参加している。会は、〈主眼を国字改良に置き・・・(中略)・・・かな文またはローマ字文の言文一致化ということと共に、明治三〇年前後の活発な言文一致活動の誘因となり、あるいは言文一致体小説出現に拍車をかけた〉<sup>15)</sup>とも評されるが、同会幹事であった高崎には、次のような発言がある。

この めいち 二十ねん に、こてい の うた ふみ を いっぺん し  
まして、つくりやすく よみやすい もの と して、 ひろい よのな  
か の べんり に そなへ・・・(中略)・・・ぶんしやう を こ  
と ば の ひつき と いふ ほんらい の せいしつ に ひきかへしま  
して、 み、ひとり の やくめ で わかる やう に いたし た  
い と おもひ ます。

「かなのくawaii の しんぱ を のぞむ」(「かなのてかゝみ」1887・2)

ここで語られるのは〈こてい の うた ふみ〉＝固定の歌文を〈いっぺ

13) コレクション行為の政治性について、松宮秀治『ミュージアムの思想』(白水社、2006)を参照

14) 1867年の奥羽巡行、また1878の北陸・東海道巡行の際には、巡行先の人々の詩歌が蒐集されている。それぞれ『埋木廻花』(書誌本文中)、『千草能花』(宮内省、1880)として高崎により纏められ、宮内省から出版された。天皇の政府が新領土の人々の歌を集め、取り纏めた理由の一端は本文で記したようなコレクション行為の政治性という観点から説明できるだろう。

15) 山本正秀『近代文体発生の史的研究』(岩波書店、1965)

ん〉＝一変させること、文字の使用を〈ほんらい の せいしつ〉＝本来の性質であった〈ことば の ひつき〉＝言葉の筆記機能に返すために、「かな」を使用すべきという主張である。引用文の表記からもわかるとおり、このアイデアは表意文字である漢字を排除（※但し漢数字を除く）しており、「耳一人の役目」でそれが理解されるように、表音文字である仮名を尊重している。かつて江戸期の国学者らも漢字の意味性を嫌悪、排除し音声言語の優位性を主張したわけだが、「かなのくわい」の主張もその意味で、かつての国学者と繋がるものといえる<sup>16)</sup>。

さて、引用文中では〈うた〉もまた改良の射程圏内にある。そこで考えておきたいのは、ここでもまた〈ほんらい の せいしつ〉の喪失とその回復というテーマが繰り返されている点である。今はほとんど失われたが、歌は〈<sup>ナゲキ</sup>嗟歎<sup>コエ</sup>の声音〉であらねばならず、また文字は音声としての言葉を筆記するという機能に返さなくてはならない。この二つの問題を重ね、さらに推測するならば、高崎は、歌の生まれる始発点に〈<sup>ナゲキ</sup>嗟歎〉を指定し、そこから生まれる〈<sup>コエ</sup>声音〉に対して、音声をそのままに捉えるという「かな」を用いようという論理を保持していたのではなかったか。それにより、歌を詠む人々の始発点にある〈<sup>ナゲキ</sup>嗟歎〉という内面を、外部に十全に露出させた歌、つまり「まことの歌」が可能となる。高崎はこうした思惑から「かなのくわい」の諸活動に参じたのではなかったか。

### Ⅲ、「まことの歌」としての「御製」

高崎が人々の内面そのままの発露を歌の理想としていたことは、次のような和歌〈おもふこともたしがたくてうちいづる声より外の歌はうたかは〉（題「歌」）<sup>17)</sup>からも明らかである。この歌では、〈おもふこと〉を内に秘めてはお

16) 川村湊『言霊と世界』（講談社、1990）、子安宣邦『本居宣長』（岩波書店、1992）等を参照。

17) 高崎正風『多津かね集』（中央歌道会、1926）所収。

けず、遂に発してしまう〈声〉こそ歌であるという、これまで記してきたような高崎の理想とした和歌の在り方が詠じられている。だがいかなる歌であっても、世に現れるときは記号である言語に媒介される以外にない。たとえ表記に「かな」を用いたとしても、〈おもふこと〉がそのままに歌となることは、原理的に実現不可能なのだ。しかし高崎はそのような「まことの歌」を追い、その見いだし難き理想を、やがては明治天皇睦仁の和歌「御製」に投影してゆく。

歌は人の心を種として詠むのであるから、歌其のものが、極めて力あり、趣味ある教訓となるのであります・・・(中略)・・・陛下の御製は、尽く人に何ともいはれぬ一種の感動を与えられるのです。其は詠ぜんとして詠じ給ふのではなく、御性格が其のまゝ自然に發揮せられて、歌になるのであるからです。

「御製『家』」(「斯民」1910・4)

陛下の御製を拝唱致して見ると、どうも此貫之の言うた所の、自然の人情より発すると云ふことが御本ではなからうかと考へる。・・・(中略)・・・御製を拝見すると、御直話を伺ふより、陛下の御胸中に貯へられた色々な思召しが渙発して居る。

「御製に就て」(『国民教育東京講演』丁未出版、1911)

「御製」について、前の引用では睦仁の性格が〈自然に發揮せられ〉と言い、後の引用では、睦仁の胸中の〈思召し〉を、直接話すよりその歌から感じ取れると言う。どちらの引用も〈歌は人の心を種として詠む〉という古今集あるいは紀貫之の以来の作歌の玉条を引き、それと「御製」との符合が確認されている。また後の引用の別箇所では、実際に「御製」を引いて次のように記す。

すなほなる大和心をのべよとてかみやひらきし言の葉の道

これは天真爛漫の素直な心、其心を述べよとて、神が敷島の道を御開き遊ばしたと云ふ御感じである。それで此裏を申すと、織言綺語を選び、意を屈して詠むものではない、真直に自分のうち思ふ俣を言ふものであると云ふことを御感じ遊ばして、此の御製が出来たかと拝察する。・・・(中略)・・・また呉竹の直き心のゆくまゝに述べし心ぞ床しかりける

これは即ち天然自然の情を其儘に偽はらず飾らずうつし出せる言葉が、自分が見ては床しく思ふ、巧拙に拘はらず、巧み上手に旨い言葉を以て拵えた歌は天然自然でないから面白くない、各々の心を其儘うつしたすなほな歌が誠に床しい、斯う云ふことである。これなどを拝誦しても、御歌始めに、陛下が人民に歌の題を賜はつて御詠ませになるのは前代未聞のことである。どうか此直き心を其儘に述べると宜しいが、兎角意を曲げて、巧妙に作る方に向くので、折角の御趣意に副はない歌が多かるは、返す返すも残念に思ふ。

ここでは睦仁の心中が忖度され、睦仁自身が〈真直に自分のうち思ふ俣を言ふもの〉、〈天然自然の情を其儘に偽はらず飾らずうつし出せる言葉〉を和歌の理想としていると語られる。睦仁は高崎に和歌の教えを受けたから、高崎の「まことの歌」の思想をそのままに引き継いでいることは当然とも言える。しかも高崎の説が、天皇の名において再度語られていることで、より權威付けられ、正当化されたとも言えるだろう。そしてもう一つ注意したいのは、「御製」が「まこと」を存分に発露させる一方で、〈人民〉の歌が〈兎角意を曲げて、巧妙に作る方に向く〉と論じられていることである。つまりここでなされているのは「まこと」の発露を基軸とした序列化である。存分に「まこと」を発露している「御製」が上位に、そして「まこと」の発露が足りない点で、〈人民〉の詠作がその下位に位置づけられている。こうして、すでに帝国憲法に「神聖不可侵」と規定されていた睦仁は、これらの論が書かれ

た1910年前後には、歌道のヒエラルキーにおいても人々の上位者として君臨することとなった。そして高崎ら「旧派」歌人については論難しえた「新派」歌人や、その末裔であっても、このような「御製」を盾とした高崎の見解については批判しえず、その言説をはほぼそのままに追認したのである<sup>18)</sup>。

#### Ⅳ、和歌ー〈君臣の情誼を繋げる〉メディア

前節引用で、高崎は「御製」の対極に〈人民〉の歌を見いだし、それは〈兎角意を曲げて、巧妙に作る方に向く〉と論じていた。これは「まことの歌」を理想とする歌人の立場から、人々の作歌活動における表現意識の粉飾性を論難したものと理解される。一方官僚、社会活動家としての高崎の仕事を見れば、和歌を詠むうえでの表現意識の問題よりも、更に根底のレベルの改良へと、その精力が傾注されていたことが理解される。つまり人々の心の在り方そのものが、高崎には問題視され、それを直接的に陶冶することを、彼は目指したのである。

すでに見たとおり宮内官僚としての高崎は、1880年代前後期から『幼学綱要』などの編述に加わっていた。そして社会活動家としては、1898年に彰善会を、1908年に一徳会を組織している。会がいかなる人員から成り、どのような経緯で設立されたかなど詳細については、前掲宮本誉士の詳細な研究があり再説を要せぬが、ここでは一徳会の主旨のみ高崎自身の発言から確認することとしよう。

此の一徳会と申す者は、明治二十三年十月三十日の詔勅を我が国民が実行せねばならぬといふ主義でござります。・・・(中略)・・・斯の如く臣民に

18) 例えば斎藤茂吉「明治大正短歌史概観」(『現代短歌集現代俳句集』改造社、1929)は、〈その歌調の堂々たる、御心のままの直ぐなる、さながらを詠じたまひて、毫も巧むことあらせられず。これ、御製の特徴と拝したてまつる〉と記し、また〈ともしびをさしかふるまで軍人おこせしふみをよみ見つるかな〉などの歌を〈流派を絶し、時代を絶し、ただちに和歌の本質に貫徹したもの〉と激賞している。

対して御懇切な有り難き詔勅は無いと思ひまして、詰り心を一にし徳を一にすると云ふ事が此の詔勅の眼目と思ひましたから、私は一徳会と云ふ名を下しまして、我が同胞の国臣と共に是非共一つ之を躬行実践せねばならぬと考へました（…後略）

「一徳会成立の趣意」（『史談会速記録』1908・8）

つまり一徳会は明治二十三年の詔勅、いわゆる「教育勅語」（1890）の趣旨を人々に、教え、実行させるための会だった。各地に支部会、会員同士の勉強会が組織され、名士の講演活動やさらには「心学講話」等が開かれ、さらに雑誌「一徳」の発行などを通じて、その趣旨が実行されていった。同資料の別の箇所では、高崎は殺人の増加、日露戦後の日比谷焼き討ち事件、「露探」、つまりロシアのスパイであると呼ばれた人々の存在に言及し、〈国民〉としてのモラルの低下を嘆いている。高崎の歌に〈いかにしてすきかへさまし紙よりも薄くなりぬる人のこゝろを〉（『寄紙述懐』『多津かね集』所収、註17）参照）があるが、まさしく高崎は〈人のこゝろ〉を対象に、それが〈紙〉よりも薄くなったことを嘆き、〈すきかへ〉すことを願った。〈すき〉は「漉く」あるいは「鋤く」の意であり、以前の状態を改め、作り直すことであろう。つまり〈人のこゝろ〉をそのような状態に仕向ける、教化実践への意思を詠んだ歌と考えられる<sup>19)</sup>。

かかる彼の活動のなかでは、和歌の理想の姿として彼に見いだされた「御製」にも別の役割が振り当てられることとなる。

19) 彼の作歌は国家や社会の種々相をしばしば表現対象とする。和歌に限らず唱歌制作も同様で、たとえば「紀元節の歌」の作詞なども彼の仕事である。なお高崎ら「旧派」歌人たちと唱歌の関わりについては安田寛「唱歌の作歌と御歌所人脈」（『奈良教育大学紀要』2006・10）に詳しい。また長志珠絵「国歌と国楽の位相」（『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、1995）は、「国歌」の形成に「旧派」歌人たちが参与した経緯について触れている。

明治天皇の御製が新聞に出て、世間に漏れ始めたのは明治三十七八年の戦役の頃では無かつたか。少くとも此頃から新聞にあらはれる事が多くなった。これは当時の御歌所長高崎男が漏されたのである。・・・(中略)・・・或時天皇は御製の頻々として新聞に出るのをにがにがしく思召されて高崎男を御召しになつて軽く御咎になつた。無論高崎男は龍顔に対して奉らずして俯伏して奉答するのである上にカナ聲で御言葉がよく聞こえぬから御叱りになつて居るのぢやとは気が付かずに「御製を世に漏らすといふ事は世道人心の為に非常によい事と存じまして致した事でございます。もし之について御咎があらば正風は切腹して申訳を致します」と申し上げて、調子に乗つて手で腹を切るまねをして御覧に入れた。

「明治天皇御集編纂について」(『短歌講座 十巻』改造社, 1932)

引用は井上通泰という歌人の文で高崎自身の言ではない。しかしこの言が事実なら、日露戦争前後期から高崎がした「御製」漏洩は、彼自身に〈世道人心の為に非常によい事〉と認識されていた。高崎は、「御製」という天皇の内面がそのままに発露されたという「まことの歌」をもって人々の内面に働きかけようとした。人心陶冶の具としての「御製」を発見したのである。

「御製」には、〈ちはやふる神のこゝろにかなふらむわかくに民のつくす誠は〉(『国民新聞』1904・1・7)のような民の誠忠を認め、さらに一層のそれを促す歌や、さらには〈きたひたる剣の光いちじるく世にかゝやかせ我が軍人〉(『読売新聞』1905・3・12)のような、あからさまに戦争を支持し、軍人達を督励する内容の歌が含まれている。「御製」は日露戦争期以降、アジア・太平洋戦争期に至るまで、多く「教訓的な御歌」<sup>20)</sup>として示されたという。天皇の意思をそのままに示すものとされる「まことの歌」である「御製」は、

20) 佐佐木信綱『和歌百話』(博文館, 1918)は、「御製」には〈天皇が長き大御心からして、或は国家を思ひ、或は祖神を敬はれ、或は国民をおぼし、或は修養の意を詠じ給うたもので、一言にいへば、教訓的な御歌〉があると指摘する。



カルタや唱歌、習字手本、また国定教科書に収録されなどして、人々の身心を律する規矩として社会に流通するのだが、それも、もとは高崎の考えから始まったのである<sup>21)</sup>。

さて、これまでの記述を一端まとめておくと、高崎は、その人の心がそのままに現れた「まことの歌」を求め、その実現を志した。だが、歌会始の詠進歌や『埋木廼花』などのアンソロジーをまとめるに際して、高崎に苦々しく思われていたのは、民間の人々の歌に、そうした「まことの歌」がなかなか見いだし難い事実である。とりわけ詠進歌にあっては、人々の制作意識の粉飾性が耐え難く感じられたようだ。一方、睦仁の「御製」はそうではない。その心がそのままに表現された「まことの歌」として、高崎はそれを重要視し、人々に示したのである。これらの事実をふまえたうえで、なお問題にすべきは、高崎が天皇と人々を「まことの歌」を以て、相互に交通せしめようとしたその構想であろう。構想は、高崎自身の発言によれば、既に明治初年代より企図されていた。

此歌の道ばかりは、言の葉のまことの道の嬉しきは高きいやしきへだてざりけりと、云はれし如く些も上下尊卑の差別無く、上天子より卿大夫、下庶民に至るまで、少しも区別が無い。そこが歌の尊いところである。そこで自分は、之れは歌の道を措ては、外に君臣の情誼を繋ぐものは無いと云ふ考へが起つた。

高崎正風述・遠山稲子篇『歌ものがたり』（東京社、1912）

第一節で紹介した『埋木廼花』を編むに当たり、高崎は上記のように思い至った。つまり〈言の葉のまことの道〉、〈歌の道〉を以て、〈君臣の情誼〉を繋げるというのだ。

21) 「御製」の近代日本における種々の役割については拙稿「明治天皇『御製』のポリテクス」（『日本近代文学』2008・11）を参照。

和歌にこのような役柄が振り当てられたことで、そのジャンルは、明治国家のなかで新しい意味を帯び始める。幕府時代を経て、新政府の統治を受けることとなった民衆と、彼らにはまだ目新しい君主とを媒介する「実学」として、和歌はそのとき価値付けられたのである。そしてそれからの高崎は、歌論の著述活動などで和歌による「まこと」の発露を人々に促した。また官僚、あるいは社会活動家としての高崎の諸活動も、そうした国家の構想と関連づけて考えることも可能ではないだろうか。例えば「まこと」を発する母体である人々の心そのものの浄化活動、あるいは「まこと」をよりよく表現するための「かな」使用を勧める運動等として、である。その確定は、高崎の他面にわたる諸活動の更なる詳細な検討を待ってなされなければならないが、ともあれ高崎が単なる一歌人でなかったことには注意する必要があるだろう。その思想は単なる机上の歌論の枠に留まらず、彼の様々な立場、実力を通して社会に広められ、現実化されようとしたのではないか。

### 終わりに―高崎正風を批評するために

見てきたように、高崎は和歌により天皇と人々を繋ぐことを構想し、その現実化に努めた。言うなればそれは“和歌国家”の構想とも言えようが、しかしそれは高崎の言うように、〈上下尊卑の差別無〉い、天皇から庶民まで〈区別が無い〉ユートピアとは、ついになりえない。

その国家では〈君臣〉という上下の関係は自明であり、そこに支配／被支配という権力の非対称性は温存されている。両者を繋ぐという「まことの歌」は、個々人がありのままの心情を述べるというものだが、しかし高崎が日露戦争後の人々のモラルの低下を嘆いたように、その「まこと」は自ずと限界を孕んでいる。例えば「新派」歌人であった石川啄木が、朝鮮併合や大逆事件に際して詠出した国家への批判を含む詩歌を高崎のいう「まこと」は包含しえたろうか。高崎ら「旧派」の歌人・和歌が、若者の支持を取り付けられず「新派」に凌駕されていった理由の一端が、そこにも胚胎していたといえ

る。

そうして高崎の歌人としての評価は、「新派」の登場以降、今に至るまで低回したままだ。だが彼を批評するには、その歌論や実作者としての実力を再審するだけでは、恐らく足りない。というのも、これまでの記述に明らかなように、高崎は自身が構想した“和歌国家”のなかで、たとえば『埋木廼花』などの人々の歌のアンソロジーの編者、あるいは歌会始の点者として人々の歌を取り上げて天皇に呈する役目を負った。また天皇睦仁の「御製」をしばしば人々に示し、広めようとした。つまり自らを〈君臣〉の中間位置に位置づけ、両者の「媒介者」となることが彼の選択だったからである。彼自身、歌人として栄達するより「国家の事」に尽力したいと発言しているが<sup>22)</sup>、その意味でも、歌人としての枠内に彼を留めて論評することは、さほど有効とは思われない。

むしろ問題は「媒介者」としての彼の姿である。さらには現在に至るまで、折々の天皇や皇后がその感慨を伝えるという「御製」が新聞やテレビで報じられていること、また一方では、歌会始には万を超える人々の和歌が寄せられているという現状である。つまり高崎が明治期に構想した“和歌国家”及び和歌の在り方が形を変えながらも、したたかに延命しているという事実<sup>23)</sup>こそが問われるべきなのだ。高崎がプログラミングした、そうした国家の在り方、そのような役割を果たす和歌の特質と功罪を問うことで、はじめて問題は現在性を帯び、またその人物にもクリティカルに迫ることが可能となろう。本稿はそこにいたる一階梯である。

※本稿は、山梨大学に於ける日本文学協会第28回研究発表大会（2008・6・

22) 高崎正風述・遠山稲子篇『歌ものがたり』（東京社、1912）

23) たとえば2010年に天皇、皇后は奄美大島の豪雨災害、小惑星探査機「はやぶさ」、ワールドカップ南アフリカ大会等を材として歌を詠出したことが宮内庁より明らかにされている。また同年の歌会始に寄せられた歌数は20802首。ともに「読売新聞」（2011・1・1、同年1・14）参照。

29) で「明治期日本の和歌と政治—歌人・官僚高崎正風の営為をめぐって」  
題で発表した草稿を加筆，修正したものである。

## Poetry in the Wake of Imperial Japan: Politics of the Traditional Literature Since 1868

Shunji MATSUZAWA

Traditional Japanese poetry (*waka*) faced extreme difficulties due to the massive inflow of western thought at the emergence of Imperial Japan in the late nineteenth century. Masakaze Takasaki, a *waka* poet, who served Emperor Meiji in a governmental capacity, played a crucial role for the continuation of *waka* during the time of Japan's westernization. How did Japanese traditional literature survive in a time of extraordinary socio-cultural and political transformation? This paper explores the history of Japanese poetry culture and the role of Takasaki in its struggle, renewal, and stabilization since 1868. Historical analyses provide an alternative view of the history of poetry in Japan. Takasaki, as a government bureaucrat and social activist, established the ideal *waka* poetry typology and played an important role in the diffusion process of the renewed traditional culture. His poetry work attempted to turn the attention of Emperor Meiji and political elites in the Imperial Government toward the minds of the people. As a result, *waka* poetry became an important spiritual and political binding between Emperor Meiji and people of Japan. Thus, by bringing the cultural status of poetry into the political arena, Takasaki contributed to the renewal and continuation of a cultural tradition and literature. In the emergence of Imperial Japan, Masakaze Takasaki gave new value to traditional Japanese poetry, which once thought to be unnecessary in a rapidly modernizing and westernizing society.

Keywords : poetry, politics, Imperial Japan, Masakaze Takasaki,  
Meiji Emperor